2025年7月2日•4日　水曜祈り会•金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「荒れ野にて」　テキスト:民数記9章15節-23節

【理解の手がかりとして】

参考：塩野和夫『人生は荒野の旅路―民数記を学ぶ』／浅見定雄『旧約聖書に強くなる本』

■　「民数記」について

エジプトを出立し、イスラエルは当面の目標であったシナイ山に 3 ヶ月かかって到達した。しかしそこが最終目的地ではなく、約束の地カナンへの途上であった。シナイにおける休息を終え、イスラエルはいよいよ本格的な旅に出た。それは荒れ野での宿営と行進を続ける旅である。そこで必要となったのが、集団として荒れ野の旅を続けていくために、共同体としての整えである。

そう、民数記の主題は「共同体」である。第一部（1～10 章）はシナイにおける 20 日間にわたる旅の準備であり、イスラエルが共同体として整えられたのは。この時である。そして 40 年に及ぶ旅路の後にカナンに到着した。第二部（11～20 章 13 節）がその旅路を物語る。第三部（20 章 14 節～36 章）はヨルダン川東岸における定住を描く。このように共同体であるイスラエルの形成、歩み、帰結を民数記は記している。

しかしその 40 年の旅では、さまざまな問題が生じ、共同体の危機にも陥った。彼らはエジプトをあとにした時と同じようにつぶやき始めた。団結を乱し、おじけづき、神を疑った（11-12 章）。虐げられた民族を解放して「約束の地」を与えようとする神の意志よりも、過去の奴隷の状態の方がよかったと言い出した（14:1-3）。あげくの果てに、あせって無謀な行動に出た（14:39-45）。こうしてカナン入りは一挙に 40 年も遠のいてしまった・・・（14:34）。不信仰のため陥った過ちを見つめさせられる荒れ野の旅路の記録でもある。主題は「共同体」と述べたが、もっと言えば「信仰共同体」に関する学びである。

ちなみに「民数記」の書名はギリシャ語訳の「アリスモイ」（数）に従ったもので、２回にわたる人口調査の出来事に基づいて命名。ヘブライ語聖書では「ベ・ミドバール」（荒れ野にて）を書名とし、イスラエルの荒れ野における生活の記録であることを示している。※章数は「三六（ミム）数記」、全部で３６章！

以下に、本課のテキスト（9 章 14 節までの内容を簡単に列記しておく。）

① 人口調査と配置（1-2 章）・・・イスラエル全部族の人口、ただし 20 歳以上の成年男子の人数のカウント。その上で、幕屋を中心とした各部族の配置が決定。イスラエルはこの配置に従って整然と旅を続けた。
② レビ人の召集（3-4 章）・・・レビ人には聖所を司る職務が命じられた。
③ 諸種の規定（一）（5-6 章）・・・一般人を対象としたもの。
④ 部族指導者の献げ物（7 章）・・・各部族の指導者が代表して献げ物をしたと報告されている。
⑤ 諸種の規定（二）（8-9 章 14 節）・・・レビ人や祭儀に関するもの。

■　9 章 15～23 節　解説（10 章概説含む）

シナイを出発する様子を伝えているこの部分。イスラエルのシナイ出発、それは 40 年に及ぶ荒れ野を旅していく信仰共同体の旅立ちであった。共同体とは「私」ではなく「我ら」である。その要は何か、それは他でも無く「神」である。彼らは神に対する信仰共同体であり、幕屋も祭司制度も犠牲（献げ物）の規定も信仰共同体として整えられるためであった。

この 9 章 15～23 節で言われていることは二つ。①雲が幕屋を覆っている間、イスラエルはその地に留まっ

た。②幕屋から雲が昇るとイスラエルは進んで行った。

「雲」は神の臨在の徴である。雲が幕屋を覆ったというのは神がその所に留まっておられる徴。その逆も又真である。雲は神の意向の道具として当時要している。「大切なことは道具であった『雲』ではなく、『主の命令』である。イスラエルは『主の命令』に従って荒野を旅した。荒野の旅の本質は主の導きによる。」（塩野氏）―――「彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令に従い、主の言いつけを守った。」(9:23)

10 章に進むと、「ラッパの合図」が鳴る。これは主に会衆の召集と出発のためである。そのラッパの音に人々は神の時と守りを思ったのである。雲の徴とラッパの合図を語った後に、いよいよシナイ出発の記事（10:11-28）が続く。まず、東に宿営していたユダ・イサカル・ゼブルンの部族が先頭に立つ。次に南に宿営していたルベン・シメオン・ガド部族が続き、その後に西に宿営していたエフライム・ベニヤミン・マナセ部族が旅立つ。最後が北に宿営していたダン・アシェル・ナフタリ部族の順である。

10 章 29～32 節には荒れ野の旅の「道案内人」に関する記述がある。モーセの義兄ホバブである。モーセはホバブに荒れ野の旅の道案内を依頼した。続く 33～36 節は「契約の箱」に関するもの。これが何を意味するか、それは旅路には実際に同行する「道案内人」が要るのであるが、その全てにおいて主が導かれる旅であることを物語っているのであろう。―――「主の契約の箱は・・・彼らの先頭に進み、彼らの休む場所を探した。」(10:33)

シナイを出発したイスラエルは主の導きによって荒れ野を旅する。「主の命令によって」(10:18、20、23)という信仰がその旅路の基本的な特徴である。この世を旅する信仰共同体である私たち「教会」が学ぶところは大きい。

（聖書教育より）

「目標を目指して神と共に歩む荒れ野の旅は、教会の理想の姿でもあります。私たちは既に得たのではなく、未だ得ていないものを得ようと努力しているからです。」(聖書の学び～1. モーセ五書の中の民数記)
→フィリピ 3:12-14

「『旅立つ』という言葉の直訳は『杭を抜く』というものです。・・・何かを解かなければ何かを始めることはできないのでしょう。」(聖書の学び～3. 自由な神と共に旅立つ)